

「宣戦布告の日」

「大詔奉戴・あの日の感激」

木村荘八

宣戦布告の第一報（ラジオ）は聴きませんでした。二、三回目の放送でそれを聴き、戦争が始まってゐるといふことを知って頭から水を浴びたように感じました。予て期さないことではありません。しかしいよいよ戦争がはじまった宣戦布告の大詔渙発せられたといふことは、断然たる感慨でした。

自分の如きは何をすべきか。自分は美術に籠る他は無い、と火のように感じました。そのことを友人の岡鹿之助に手紙で書いたのが同日の夕方のことでした。

十二月八日の夜は、上野に小杉放庵さんの会がありました。これへ行く道が真暗で事々しい感じを受け、道々も乗りものなどで人々の顔が緊張して沈鬱勝ちに、上野の会合の席でも、却って戦争談は出ずに、互ひに顔を見合つて、胸には同じ考へを持ってゐるようでした。

美術に立て籠るほかには自分には何も出来ない。美術によつて皇国へ報じよう。と、いく度も同じことを考へわびました。

（昭和十七年十二月十七日 東亜新聞）